



【この活動の概要】

主な活動	海外大学との学生交流
関係機関	済州大学（韓国・済州島）、新羅大学（韓国・釜山）
実施時期	2016年11月3日～7日
参加者数	4年生7名

【先生に直接聞いてみました】

Q この取り組みを始めた経緯は？

A 外国語学部では、2年次にスタディ・アブロード・プログラムとして、すべての学生が主専攻言語に基づき海外の提携大学へ約1年間の留学を行います。このプログラムを経験したゼミ生（4年生）に、英語を使って研究と発表を行う機会を作りたいと考えました。英語は、ネイティブ・スピーカーと会話するためのものではなく、世界中のノンネイティブ・スピーカーと交流するためのものでもあります。このことを体験してもらうために、英語教育で定評のある韓国での研究発表会を企画しました。単に観光で外国に行くというだけではなく、あくまでも学問的な発表を英語で行うことを目標として、観光でも楽しめる済州島（済州大学）へのゼミ旅行をやりたいと考えました。英語の論文を読み、英語でプレゼンテーションし、ディスカッションする指導に力を注ぎました。この企画を話したところ、釜山にある新羅大学の教授からも招待されたので、新羅大学に立ち寄り、日本語専攻の学生たちとも交流することにしました。こちらでは、日本語を学んでいる学生たちに、勉学などで協力しながら文化交流することが目的でした。



【新羅大学での発表の様子】

Q ゼミ旅行の内容は？

A 合同プロジェクトのテーマは、ゼミ生たちのディスカッションを経て「外国人旅行者に対する日本のおもてなし」になりました。ゼミ生たちは文献調査並びにフィールドワークを鋭意進め、分析作業を行いました。英語での発表を想定した活動自体は相当な労力が必要でした。これと並行して、私は済州大学の先生（英語科教授）と綿密な打ち合わせを繰り返し行いました。現地での発表会では、双方がプレゼンテーションと質疑応答のすべてを英語で行い、活発な研究交流ができました。終了後は参加者全員で懇親会を行い、互いに親交を深めました。翌日は済州島の観光でしたが、発表会の達成感があるので、思いっきり楽しんでいました。美しい海岸や鍾乳洞（世界遺産）など、済州島の自然に接することができて、みんな感動していました。翌日、釜山に移動して、新羅大学では日本語を通じての文化交流会を行いました。釜山の観光では、現地の大学生たちがゼミ生たちを案内してくれました。



【済州島観光の様子】



KANSAI UNIVERSITY



【済州島観光の様子】

Q ゼミ旅行の成果は？

A 2年次のスタディ・アブロード・プログラムで培った英語力を生かしてゼミで研究を進め、英語で研究発表ができたという充実感を感じたようです。また、韓国の学生とも交流ができて、リング・フランカとして英語を使うことの意義を実感できたと思います。先方の先生と学生からも、大変貴重なイベントであったとのことのお言葉をいただきました。いずれの大学においても、手厚くもてなしてもらって、とても親密な交流ができました。ゼミ活動を通じて、ゼミ生たちは互いの絆を強めることができました。発表会に向けての準備は、就職活動と重なったこともあり、結構大変だったはずなのですが、ゼミ生たちは全く弱音をはかず、最後までよく頑張ったと思います。

Q リング・フランカって？

リング・フランカ (lingua franca) とは、異なる言語を話す人たちにとっての共通語のことです。例えば、日本人と韓国人、中国人のグループで、もし互いに話せる共通の言語が日本語の場合は、日本語がリング・フランカになります。

Q 参加した学生の反応は？

A 先方の学生の高い英語力に鼓舞され、英語を使うことへのモチベーションが高まったようです。また、学生同士では共通の話題がたくさんあったようで、互いにすぐ打ち解けて仲良くなっていました。帰国後、「達成感でいっぱい」など、どの学生からも、とてもポジティブなフィードバックがありました。



【新羅大学の学生たちとの夕食会】



KANSAI UNIVERSITY

Q 苦労された点は？

A 先方の先生との打ち合わせでは、双方のゼミ活動の進め方が異なっているため、発表会に向けての作業の調整などでてこずりました。また、英語でプレゼンテーションするためには、相手に理解できる発話が不可欠なので、表現や発音の練習も行いました。研究活動だけでも大変なのに、英語での準備をするためにさらなる努力が求められました。研究、英語の準備ともに難しい課題でしたので、モチベーションを維持させながら研究の質を高め、同時にゼミ生の自主性や判断を尊重するというバランスに気を配りながら指導しました。

Q 費用は？

A LCC を利用すれば韓国までの旅費は国内の旅費とあまり変わらず、それほど高額にはなりません。卒業ゼミ旅行も兼ねていますので、費用負担には納得できているようでした。

Q 今後の展開は？

A 英語を使つての学術交流をベースとしながら、異文化への理解を深められるようなプログラムを開発していきたいと考えています。国家間の関係にとらわれず、人と人との交流を通じて友情を育めるような活動を続けたいです。



【済州大学の正門にて】

【関係者紹介】

高橋 秀彰

専門は社会言語学、言語政策論です。ドイツに留学した経験があります。外国語学部の学生は、好奇心が旺盛で、努力家が多いので、授業やゼミ活動を楽しんでいます。

発行：関西大学国際部 <http://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/>



KANSAI UNIVERSITY